

人称詞オレの歴史的変化

米田 達郎

工学部 総合人間学系教室
(2016年9月30日受理)

Historic change of person words '*ore*'

by

Tatsurou YONEDA

Department of Human Sciences,
Faculty of Engineering

(Manuscript received September 30, 2016)

Abstract

In this paper, I considered historic change of 'ore'. This word is used from the eighth century, but this is used as the second person. 'ore' as the second person is used as an abusive expression. This word is not used anymore in the Muromachi era. On the other hand, it is from around 12th century that 'ore' as the first person by which it seems to connect with the present-day Japan language is used. 'ore' as the first person possess a polite nuance of the word, and moreover it's unisex. But 'ore' as the first person will be a vulgar word in around 19th century when the time went down, and a lady doesn't use 'ore' as the first person any more. this situation is same as present use situation mostly.

キーワード ; オレ, 自称, 対称, 待遇価値, 女性の使用するオレ

Keyword ; ore, the first person, the second person, politeness, ore whom a woman uses

1. はじめに

現在、東京において若年層や老年層を問わず、女性が自称のオレを使用することは基本的にないといっ
てよい¹⁾。一方、男性には地域や年齢層に関係なく使
用される。もっともその使用傾向は仲間内に限定され
るようである。2007 年度・2009 年度に大阪工業大学
において開講されていた人文社会入門 I において、
「オレをどのようなときに使用するか」というアンケ
ートを行ったところ、仲間内での使用が 95%を超え
た。回答者から見て上位者や初対面の人物には、ほぼ
使用されないことがわかっている。また使用者につい
て聞くと、若い男性（10 代および 20 代）に限られる
という回答であった。なお、2006 年度にある女子大で
行ったアンケートでも同様の結果であった。このよう
な現状は関西だけではなく、関東でもほぼ同じと考
えてよいだろう。そうすると、オレは男性のみが使用
する人称詞として捉えられる。しかし東京以外に目を向
けると、西日本では使用されることはないが、北関東・
北陸・東北のある地域では女性がオレを使用するこ
ともあるようである²⁾。筆者の聞き及ぶところでは、富
山・福島・栃木などでは年配の女性が使用するという。
また尾崎善光氏（ノートルダム清心女子大）から、現
在でも山形市内の女子中学生の 20%が普段の人称詞
としてオレを使っているとの教示を得た。現在でも、
老年層が中心とはいうものの、北陸から東北を中心
に使用されていることがうかがえる。

そもそも、オレは奈良時代から語形としては見ら
れ、日本国語大辞典第二版では「オレ」を次のように
説明している。抜粋したものを引いておく。

- 1) [代] 一人称の人代名詞。元来、男女の別なく用
いたが、現代では、男子が同輩または目下に対し
て用いる。(1) 対称。下位の者に対して、もしくは
相手へののしる時などに用い、軽蔑の意を含む。
(2) 自称。広く貴賤男女を問わず目上にも目下にも
用いた。現代では、男子が、改まらない場面で同
等もしくは目下に対して用いる。

（『日本国語大辞典第二版より抜粋』）

辞書の説明を見ると、以前は対称と自称の用法があ
り、自称のオレは男女を問わず広い階層に使用されて
いたことがわかる。米田（2009）で見たように、狂言
や江戸時代後期では女性が使用したオレを確認する
ことができる。つまりオレは、江戸時代後期江戸では
女性に使用されていたが、時代が下り現在の東京では
使用されずに地方で使用されるようになっていたとい
うことになり、柳田国男が提唱する方言周圏論とは

いわないが、それを彷彿とさせるような分布状況にな
っている。このような状況を見ると、なぜ東京語にお
いて女性がオレを使用しなくなったのかという問題
てくる。そこでこの問題点に関して本稿では、オレの
語史を奈良時代から明治時代まで辿る中において、考
察していくことにする。

2. 奈良時代のオレ

奈良時代のオレについては、すでに辻村（1968）で
明らかになっている。特に辻村（1968）の説に付け加
えるべき点もないが、ここでは後世との関係も踏まえ
て、用例を検討しておく。なお、用例の振り仮名は最
小限にとどめている。また下線は筆者による。

- 2) 詔して曰はく、「惟るに、爾蝦夷は、大足彦の世
に、殺すべきは斬し、原すべきは赦す。今し朕、
彼の前の例に遵ひて、元悪を誅さむと欲ふ」との
たまふ。〈詔して、「思うにお前蝦夷は大足彦天
皇（景行天皇）の御世に、殺すべき者は斬殺し、
許すべき者は許した。今、私は、その先例に従っ
て、首謀者を誅殺しようと思う」と仰せられた〉
（『日本書紀』②479 頁）
- 3) 時に道臣命、審に、賊害之心有ることを知りて、大
きに怒りて誥ひ噴ひて曰はく、「虜、爾が造れる屋
に、爾自ら居よ」といふ。〔爾、此をば飲例と云
ふ。〕〈声を荒げて叱責して、「敵のやつめ、う
ぬが造った建物には、まず己自ら入ってみろ」と
言った。〉（『日本書紀』①207 頁）
- 4) (略) 意礼熊曾建二人、伏はず礼無しと聞し看して、
意礼を取殺れと詔りたまひて遣はせり」〈天皇はお
前ら熊曾建二人が服従せず秩序を乱していること
をお聞きになって、お前らを討ち取れと私にご命令
になった〉（『古事記』221 頁）
- 5) 汝が庶兄弟をば坂の御尾に追ひ伏せ、亦、河の瀬
に追ひ撥ひて、おれ、大国主神と為り、〈お前の
腹違いの兄弟を坂の御尾に追い詰め、また川の瀬
に追い払いて、お前は大国主神となって〉
（『古事記』85 頁）
- 6) 是に、海神制めて曰はく、「爾、口女、今より以往、
吞餌ふこと得じ。」〈ここで海神がなだめていうに
は「お前、口女よ、これからは釣の餌を食べてはな
らぬ〉（『日本書紀』①170 頁）

奈良時代におけるオレは対称として使用されている。しかも、用例2~4からわかるように、話し手が聞き手に対して敬意を払う必要のない場面で（そもそも、上位者から下位者に敬意を払う必要はないが）使用されている。用例2は、討伐しに来ている場面であり、その中で相手の命を奪おうと脅している。このことから、オレが罵り表現の中で使用される人稱詞であることがうかがえる。用例3も同様に「大きに怒りて」と罵り表現の中でオレが使用されている。用例4は帝に従わない熊曾を罵っていると捉えることができる。ところが用例5・6は用例2~4までとは同様に扱うことはできない。用例6は大国主神が黄泉の国から逃げ帰ることに怒った須佐之男大神が、大国主神の背に言葉投げかけている場面である。ここでは、大国主神が現世に戻った後になすべきことを伝えている。須佐之男大神からすると怒ってはいるものの、用例2~4のように、聞き手を罵るような表現ではなく、むしろ大国主神の今後をアドバイスすることからすると、一種の愛情表現として使用されていると解釈できる。この解釈の背景には須佐之男大神にとって大国主神が娘婿にあたるという関係もある。以上を踏まえると、用例2~4までのものと一線を画す例にみえる。しかし、罵倒表現と愛情表現は表裏一体の関係である。例えば現代日本語でも「馬鹿」は罵倒表現であるが、状況や言い方などで愛情表現になるのと同様である。用例5もこれまでのオレの用法の一つとして考えられる。一方用例6は人稱詞ではなく、海神から口女に対する呼びかけ語として捉えられる³⁾。用例2~5までと共通しているのは上位者から下位者に対するという方向性だけである。以上述べてきたことをまとめると、奈良時代のオレには、聞き手を罵る用法と、呼びかけ語としての用法を認めることができるということになる。

3. 平安・鎌倉時代のオレ

3.1 対称のオレ

対称のオレが上代には見られた。平安・鎌倉時代になると、対称のオレだけではなく、現代にまでつながると思われる自称のオレを認めることができる。本節ではまず、対称のオレがどのような場面で使用されているかを見ておくことにする。

7) いとなめううたふ聞くにぞ心憂き。「郭公、おれ、かやつよ。おれ鳴きてこそ、われは田植うれ」とうたふも聞くも、いかなる人か「いたうな鳴きそ」とは言ひけむ。〈郭公のことをひどくぶしつけに謡う

のを聞くのは、全く不愉快だ。「郭公、きさま、きやつよ。きさまが鳴くから私は田植えをする」と謡うのを聞くに付けても、一体どういう人が「いたくな鳴きそ」と詠んだのだろう)

(『枕草子』「賀茂へ詣る道に」 210段)

8) さらばとて厚紙をたづねてえさせたり。文覚わらって、「法師は物をえ書かぬぞ。さらばおれら書け」とて書かすよう【下略】〈それならばとって厚紙を探し出して与えた。文覚は笑って「わしは字が書けないのだ。だからお前らが書け」といって書かせるには【下略】〉

(『平家物語』「文覚被流」 387頁)

9) 舎人二人みて「人な入れそと候ふ」とて、立ち向ひたりければ、「やうれ、おれらよ、召されて参るぞ」といひければ、これらもさすがに職事にて常に見れば、力及ばで入れつ。〈舎人が二人いて、「人を入れるなどの仰せです」と、立ち向かって来たので、「やい、おまえたち、召されてまいるのだぞ」と言う、この連中も、職事の以長をさすがに常に見知っている、しかたなく中に入れた)

(『宇治拾遺物語』「以長物忌事」 175頁)

10) 出納係いふやう「おれは何事いふぞ。舎人だつる。おればかりのおほやけ人を、わがうちたらんに、何事のあるべきぞ。〈おまえは何を言うか。舎人ふぜいのおまえのような役人を、俺が打ったからとて、どうということもないんだ)

(『宇治拾遺物語』「伴大納言焼応天門事」 306頁)

11) をれはいみじき盗人かな。さはありとも、歌は詠みてむやと言ふに〔下略〕〈おまえはとんでもない盗人だな。そうであったとしても、歌はきつと詠むだろう)

(岩波新古典文学大系『古本説話集』

「大隅守事」 44頁)

この時期における対称のオレは基本的に罵り表現であり、奈良時代のオレと関係があると推測される。まずは用例を検討しておく。

用例7では田植えをする女性が、郭公に声かけをするときにオレを用いており、二つ目のオレは対称詞として使用されている。清少納言は、郭公を貶めるような歌を、田植えする女性が歌うのを聞いて、「心憂き」と述べる。このような評価をされる歌の中でオレ(呼びかけ語、対称詞の両方)は使用されており、必ずしも丁寧な語感を有するものでないと考えられる。特に用例7は歌謡である。歌謡は、当代よりも古い言い方を保持する傾向にある。これは現代でも童謡・唱歌な

どを思い浮かべれば、納得いくところであろう⁴⁾。用例7の呼びかけ語としてのオレは、先に見た用例6にきわめて近い用法のオレであり、奈良時代のオレとの関係が認められる。用例8以下では、聞き手を話し手が馬鹿にする、罵倒するという場面でオレが使用されている。用例9・10はまさに話し手が聞き手を罵る例である。人間関係を見ると、上位者から下位者というわけではないが、権力を背景にしての発言であることを踏まえれば、これも心理的上位者から下位者に対して使用されているとしてよいだろう。場面・人間関係からわかるように、対称のオレには、奈良時代同様に丁寧さはないといえる。それに対して、用例11は盗人が歌を詠むことで、大隅守がその罪を許そうとしている場面である。決して、聞き手を罵る例とはいえない。これは、前章において見た用例5と同じ用法と考えられる。つまり、盗みを働いた人物を、歌を詠むことで許そうとする大隅守が、盗人まで視線を下げ、親近感を出しているといえる。

この時期の対称のオレは、基本的に罵倒表現で使用されており、奈良時代の用法を押さえたうえで見ると、その用法を踏襲したものと考えられる。

辻村(1968)では奈良時代の対称のオレに関して、奈良時代のオレは平安時代以降、『源氏物語』に見られる形容詞「おれおれし」との関係を想定している。

12) もとよりをれをれしく、たゆき心のおこたりに、まして方々の紛はしききほひにも、おのづからなん
 〈私(源氏)はもともとぼんやりしていて、何かと気の回らない性分ですので、不行き届きもありましようし。そのうえ、雑事が次々とできてくるものですから、しぜんについ・・・〉

(『源氏物語』初音 155 頁)

13) よはひなど、これよりまさる人、腰堪へぬまで、かゞまり歩くためし、昔も今も侍めれど、あやしく、おれおれしき本性に添ふ物憂さになん侍るべき」など、きこえ給ふ。〈私よりも年上の人でも腰が折れ曲がるまでお仕えしている人がいる例が今も昔もありますが、私はなぜか愚かしい性分ですて、さらに無精になってしまったようでございます)

(『源氏物語』行幸 237 頁)

源氏物語に使用される「おれおれし」は、上代のオレと関係あるような訳語が使用されている。意味の類似から考察している辻村(1968)の説明は貴重なものである。しかし、辻村(1968)でも述べられるように、語としての先後関係からすると、無理がある。また、『源氏物語』とほぼ同時代の『枕草子』をはじめとし

て、その後の鎌倉時代の作品など、対称のオレの用法が奈良時代のもとの酷似している例が見られる以上、辻村(1968)でも否定しているように、「おれおれし」との関係を考えることはできないだろう。くり返しになるが、平安・鎌倉時代のオレは、奈良時代のもを踏襲しているものとしてよいだろう。

3.2 自称のオレ

この時期の対称のオレは丁寧な語感を有しないことを前節で述べた。しかし、平安・鎌倉時代には、用例数は少ないものの、自称のオレも見られる。本節では自称のオレの用法を検討することにする。

14) ただほれてゐたるに、御前のおはしまして、
 「いざ、いざ。黒戸の道をおれが知らぬに、教えよ」とおほせられて、引き立たせたまふ〈ただぼうっとしていたところに、鳥羽天皇がお見えになって、「さあさあ、黒戸への道は私には知らないので、教えておくれ」と仰って、私たちをお引き立たせなさるので)

(日本古典全書『讃岐典侍日記』

「菽の戸の花」458 頁)

15) ヲレヲカコノムキマカヌモノナラハ、メコトモヲヲイコメ、ミミヲキリ、ハナヲキリ、カミヲキリテ、アマニナシテ、【下略】〈私たちがこの妻を蒔かないのであれば、女子供を追い込み、耳を切り、鼻を削ぎ、髪を切って、尼にして、【下略】〉

(『大日本古文書』高野山文書六 487 頁)

16) 但をれが母にて候物こそ、あねよりもよく候へ。母をまかせ給候へかし〈ただ、私の母がお仕えすることは、姉よりもよくお仕えいたします。母にお任せ下さい〉

(岩波古典文学大系『古今著聞集』

「公言利口第廿五」437 頁)

用例14は当時6歳の鳥羽天皇の発話である。森野(1968)では、この例を「規範の埒外におこり、多分に臨時的に現われるかたことの一つ」

(11 頁)と説明する。子どもの「かたこと」と解釈しているわけである。確かに平安文学などで自称のオレが多用されていないことを踏まえると、森野(1968)の説は有力なものである。しかし、平安文学自体に子どもは多く登場しない。また鳥羽天皇が「かたこと」を話すのであれば、他の表現についてもそれを指摘できるはずである。

ここは、自称のオレは元々鳥羽天皇をお世話する女官など、周囲の大人たちも使用していたことが影響し

たとえることはできないだろうか。幼児が言語を獲得する場合、それは身近な大人の言葉が参考にされる。このように考えれば、6歳の鳥羽天皇が言葉を覚えて使用するというのは、周囲のお付きの大人たち（特に女官たち）が使用していたからだと推測される。この考えを補足するのが、用例15である。『讃岐典侍日記』よりもだいぶ時代は下り、13世紀に紀伊国阿氏河荘の農民たちが地頭を告発した時の文書である。この中に自称のオレが使用されている。森野（1968）の説明のように、「規範の埒外におこる」語が、時代が下って大人が使用するとは考えがたい⁵⁾。必ずしもオレが子供のものとは言い切れない。しかも、用例15は農民が自分たちよりも目上の地頭に対して発した文書である。平安時代に「かたこと」とされていた語が、時代が下り、下位者が上位者に対して使用できるようになったとするのは考えにくい。おそらく自称のオレはたまたま文学作品に使用されなかっただけであり、平安時代から使用されていたと推測される。

さて用例14・16から、自称のオレは身分ある人も使用していること、下位者から上位者に対して使用される場合、用例15のように、畏まるような場面で使用されていることがうかがえる。対称のオレとは、明らかに異なっており、しかも自称のオレの方が待遇価値は高い。

本章で述べてきたことをまとめておく。

- ① 対称のオレは奈良時代からの用法を受け継いでいると考えられ、待遇価値も高くはない。
- ② 自称のオレは、身分ある人や、下位者から上位者に対して使用されており、待遇価値は低くない。

4. 室町・江戸時代前期上方のオレ

鎌倉時代以降の資料を調査したところ、オレが見られたのは自称のみであり、対称のオレを見いだすことはできなかった。これは、対称のオレが室町時代以降において使用されなくなり、オレは自称のみになっているという事実を示す。実際に「かたこと」には以下の記述が見られる。

- 17) みずからのことを「おれ」といふはよしと云り。をのれという中略のこと葉成べし。日本紀にも侍る。〔中略〕さて此「をれ」と云ること葉は。尊氏公の世中を心のままにしたまひつる此より別してはやり出侍りて。侍分のものならでは。えいはざりしとかたれりし人侍りき
 （「かたこと」国語学大系1所収）

対称のオレに関する記述が見られないことを踏まえ、この頃には自称のオレしかないことがうかがえる。他文献からの用例を見ても、下記のように自称のオレしか見いだせなかった。つまり、対称のオレは遅くとも室町時代末にはすでに文献上では使用されることはなく、自称のオレが中心になっているということである⁶⁾。室町時代末の資料から大蔵流狂言詞章虎明本から例を挙げて検討することにする。

- 18) あふそちの隙のなひハ、身共もしつたれども、
おれが思ふハ、身共がわかクハ、さやうにとをへ
 へしうも、あるまひものをと思ふておりやが
 （「びくさだ」お寮→所 下121頁）
- 19) なふはらたちや、わたのハおれをだまひて、親里へゆけと云程に、まことかと思ふたれハ、あとからいとまをもたせおこす、
 （「ひつくゝり」妻→夫 下29頁）
- 20) なふいつもわごりよのおそうもどるによつて、
おれまであおのやうにしかるゝ事じや
 （「文荷」冠者同士 上575頁）
- 21) やれやれそれは一だんの事じや、おれはなるまひかと思ふた
 （「老武者」老武者→亭主 上138頁）

自称のオレは男女ともに使用されている。平安・鎌倉時代から脈々と使用されているものであるが、使用場面や待遇価値は、鎌倉時代とは異なるようである。

前章で見たように、自称のオレは丁寧な語感を有するものであった。しかしこの時期の自称のオレは、必ずしも丁寧な語感を有するものとはいえない。確かに用例18は尼の台詞である。しかし、用例18の直後で所の者は「わるくちをおほせらるゝ」と述べる。これは内容を言ったものであろうが、そのような発言が許される関係にあったことを思えば、尼の発言は必ずしも丁寧なものとはいえない。用例19は罵倒表現の中で使用されているオレである。用例20・21ともに男性の用例である。丁寧な語感を有するとは言いがたい。例えば20は太郎冠者が主人に叱られる理由に、二郎冠者の行動が遅いことにあるとして、二郎冠者に怒っている場面である。また用例21は仲間はずれにされたと思っている老武者が、状況を把握した場面での発言である。これらは相手に対して怒る場面での使用、日常生活の中での使用といえる。

使用者に目を向けると、男女ともに使用している

ことがうかがえる。用例 13 を説明するにあたって、幼少の鳥羽天皇が使用しているということは、周囲の女官たちが使用している可能性があるということ述べた。用例 18・19 は女性の例である。男性と女性を比較すると、一般化するつもりはないが、総じて女性の方が言葉に敏感であるように思われる。室町末期の自称のオレはさほど丁寧なものではない。平安末期で丁寧な語感を有する自称のオレを使用していなかった女性が、オレが丁寧な語感を有することのなくなった室町末期において、改めて使用するようになってきているというのは考えにくい。おそらく平安時代末期から、女性が自称のオレを使用することはあったと考えられる。

以上、室町時代のオレについて述べてきたことを簡単にまとめると、自称のオレは男女共用ではあるものの、鎌倉時代とは異なり丁寧な語感ではなく、鎌倉時代から室町時代までの間に自称のオレの待遇価値は下がっていることができる。

江戸時代前期上方になると、自称のオレは男女ともに使用されていることがわかる。山崎 (2004) でも男女共用であること、話し手からみて上位者・下位者に対して使用されることが指摘されている。具体的に用例を見ておくことにする。

22) コレ長蔵おれは跡から往の程に。そちは寺町の久本寺様、長久寺様。上町から屋敷方廻ってさうして内へ往にや。

(『曾根崎心中』徳兵衛→長蔵 ②-19 頁)

23) 由留木殿の御内お乳人の滋野井様とはお前か。そんなりやおれが母様と抱付けばア、こは慮外な。おのれが母様とは馬方の子は持たぬと。

(『丹波与作待夜小室節』 与之介→滋野井 ①-348 頁)

24) 泣きゃんな、恨みやるな。隠すではなけれども、いうても埒の明かぬこと。さりながら、おほかたまづ済みよったが。一部始終を聞いてたも。おれが旦那は主ながら現在の叔父甥なればねんごろにもあづかる。

(『曾根崎心中』徳兵衛→おはつ ②-21 頁)

25) さてはそちが拾うて、手形を書いて、判を据ゑ。おれをねだって銀取らうとは謀判より大罪人。こんな事をせうよりも、盗みをせい、徳兵衛。(『曾根崎心中』九平治→徳兵衛 ②-26 頁)
用例 22 は使用人に対して言いつける場面でのオレであり、徳兵衛は長蔵に怒っているわけではないので、日常的に使用していることがわかる。しかし用

例 23・24 を見ると日常の場面だけでないことがわかる。例えば用例 23 は、ある大名家に乳母として仕える女性を、自分の母であると与之介がを知ったときの台詞である。与之介は馬子であり、相手が大名家の乳母であることを踏まえれば、用例 22 で見たように、町人が日常的に使用するオレを用いることは、礼を失している。しかし長年探していた母を見つけたといった事態が、発話の背景にある。気持ちが高揚しているときの発話といえる。この点は用例 23 も同様である。また用例 25 は相手を罵倒している場面での使用である。つまり感情が正負に揺れているときに使用されている。ただし、自称のオレが、山崎 (2004) で指摘されるように、どのような場面において、誰に対しても使用できるというわけではない。特に自分よりも目上の人物に対して怒るような場面では、用例 26 のように「私」を使用する。鎌倉時代では下位者から上位者に対して使用されることもあったが、この時期においてはそうでないことがわかる。つまり、自称のオレの待遇価値が落ちていることがわかる。

26) やあら聞えぬ旦那殿。私合点いたさぬを、老母をたらし、たゞき付け。あんまりななされやう。お内儀様も聞えませぬ。

(『曾根崎心中』徳兵衛→旦那 ②-22 頁)

以上は男性(年齢を問わず)が使用した例でオレの用法について見てきたが、先にも述べたように、江戸時代前期上方では女性の使用例も見られる。

27) ひとつ／＼覚え侍る太夫殿の声として、「おれはくろみあへの餅をあく程」とあれば

(『好色一代男』太夫同士 ①-181 頁)

28) お傍の衆に囁かれて幼心の姫君。かう面白い東とは今までおれは知らなんだ。サア／＼行かう早行かう

(『丹波与作待夜小室節』姫→乳母 ①-348 頁)

29) お袋様も殿様も、たらしつ叱つゝあそばせども。どうでも嫌ぢやと、おむつかり。【中略】眉泣きはがし姫君は「江戸も東もこちやいやじや。おれはいかぬ」となくなはしり出給へば

(『丹波与作待夜小室節』姫→乳母 ①-341 頁)

30) 常盤町の従兄弟が所に預けて置き。商売にかこつけ。間がな隙がな、女夫こつてり、おれが知らいでおこかいの。さぞおれが事譏りやつつろ。

(『心中宵庚申』半兵衛養母→半兵衛 ②-467 頁)

女性が使用する場合でも男性の使用例の場合と同様に、日常的に使用する場合や感情が揺れている場

合に使用されている。多様な場面で使用される。男性の場合と異なるのは、男性よりも狭い人間関係で使用される傾向がある。用例 27 は太夫同士であり、日常をともに過ごしている間柄である。用例 28・29 は、とある藩のお姫様の台詞である。ここから身分ある人の使用が確認できるが、聞き手が乳母であり、いわば身内に対する使用例である。また用例 30 も聞き手を罵倒する場面での使用とはいうものの、やはり身内での使用である。山崎 (2004) では、触れられていないが、女性のオレは、男性の場合と同様に幅広い場面で使用されるものの、使用されるとき対人関係が身内にある傾向を見て取ることができる。

以上見てきたことをまとめると、次のようになる。

- a : 対称としてのオレは見られずに自称のみの用法に限られる。
- b : 自称のオレは、現代共通語とは異なり、男女共用であり、必ずしも乱暴な場面で使用されるわけではない。老若男女・貴賤を問わない。ただし、女性の場合は身内の関係で多く使用される。

5. 江戸時代後期のオレ

5.1 江戸時代後期上方のオレ

彦坂 (1983) の調査に基づけば、江戸時代後期上方での状況は次のようなものである。

- 31) 近世後期において「おれ」は次第に敬意を低下させ、用法も男性に限られるなど、卑俗でうちわなものになりつつあったことがうかがえる。この中でも地域差があり、上方・伊勢・尾張は、小差はあるが「わし」が多くなりつつあり、一方、江戸は比較的「おれ」がなお存続し、「おいら」「わっち」など特有な自称詞も用いられ、「わし」は相対的に少ないのである。(172 頁)

彦坂 (1983) では、江戸時代後期上方ににおいて、オレは卑俗なもので、男性に限られると述べている。用例 32 は彦坂 (1983) でも引用されているものであるが、確かに喧嘩をする場面で使用されており、卑俗なものといえよう。その一方で女性の用例は、今回の調査では見いだせなかった。

- 32) ヤイまたそんなことをぬかす。しぶとひ幼妻めじや。コリヤ、やい聞あがれ、おれも濃血押ねば言やせぬぞよ。

(『十界和尚話』お客同士第 17 巻 189 頁)

- 33) (客) いや、おれが勝手にあちらへ行ぞもふ

こゝはかまはんといてねや／(太夫) そんなりや御心まかせに遊ばせ御火燵の火どふで御ざりますな。(『郭中奇譚』客→太夫 第 4 巻 317 頁)
上方で女性のオレが見られないこと理由はわからない。前期上方ではお姫様など身分の高い人が使用していたことを考えると、それなりに後期上方にも使用されていてもよいとは思いますが、実際にはない。

5.2 江戸時代後期江戸のオレ

前節で彦坂 (1983) の記述を中心に、上方での用法を見たが、江戸時代後期江戸においてもその用法は、用例 34 のように、一般庶民の男性がオレを使用していることから同様のことと判断される。しかし、江戸時代後期江戸では用例 35 のように女性のオレの使用例を確認することができる。

- 34) つもる物がたりがあるおいしい色男から、埋木となるによって、だん／おれが。伝授で。善二坊のやうな色男を。揚巻の助六がやうに。つくり直さにや。ならぬ
(『遊子方言』通り者→息子 第 4 巻 349 頁)
- 35) おゝさ おれも。そふおもふよ。何にしろ。だんながら。帰ら。しやつたら。ゑみやうに。さつ。しやろ。
(『遊子方言』茶屋の女房→男 第 4 巻 355 頁)
まずは、男性の使用例から見てみよう。
- 36) そしておれもいやだ。おれが鼠でギツクリすると、幸さんがあたまを痛く打だらう。
(『浮世風呂』前編巻之上 子供同士 42 頁)
- 37) てまへが俺がとこへ来ると、あつちらの大尽がやけを起こして、遣手や廻しを呼んで、小言をいふ内の心持ちのよさは、どう安く踏んでも、五六百両がものはあるのさ
(『江戸生艶気樺焼』艶二郎→浮名 95 頁)
- 38) 其上、野郎の根づけを見るやうに、蒲団とおれ斗置いて、廊下斗、そそりやアがる
(『辰巳之園』如雷→お中 第 4 巻 377 頁)
- 39) (竹) おれが先だ／(松) べらぼう云や。おれが先へ首を出した。／(竹) おれが先へ敷居をまたいだ
(『浮世床』町人男性同士 304 頁)
- 40) コレ留。そこらをきり／掃きて、湯を沸かして置きや。おれは行て来て割ぞ。
(『浮世床』隠居→留吉 73 頁)
- 用例 36~40 から、オレの使用者が子供から老人までおり、対等の関係、上位者から下位者の関係で使用されていることがわかる。使用される場面も、用例 37 のように、日常的に使用していると考えられる

ものもあれば、用例 38・39 のように喧嘩している場面での使用もあるなど、様々な場面で使用される。これらは現代日本語と同じ用法と考えてよい。つまり、現代日本語で使用されるオレの下地はすでに江戸時代からあったことが確認できる。

一方、女性の使用例は、ほぼ同時期の上方では見られなかったが、江戸では見られる。

41) いの字いせ屋にときやうさんがおさつしやるから、おれがいふとつてよっくお出でなんしたといつてきや

(『通言総籙』おす川→かぶろ 第14巻50頁)

42) (ながしの男) サアお撥さん背中を出しなせへ、／(さみ) コレ、此人はや。おれが先へ来たものを
(『浮世風呂』二編巻之上86頁)

43) (子もり) 覚へて居ねへて。そんならなぜおれがことを悪く云つた。／(うば) 悪いから正直をいふのよ／(子もり) こつちも其通りさ／(うば) まだまけねへか口ばたきめ／(子もり) おれが口ばたきなら、そつちは尻ばたきだ

(『浮世風呂』二編巻之下136頁)

44) 何でもおれを馬鹿にしてゐるからだア。仮にも親だぞ。あんまり口返答をしたり、わが儘がしたくは、してへやうに何もかもいわれねへさんだんをするがいゝ。

(『春色梅児誉美』おくま→お長 131頁)

45) (仇) 「増吉さん」(宅より女のごゑにて)／(増) ライだれだ／(仇) おれだヨ。おめへひとりか／(増) ム、おれ一人だ。だれも居ねへ這入ねへな

(『春色辰巳園』仇吉→増吉 258頁)

江戸時代前期上方において、女性が使用するオレは、身分の高い人から一般庶民まで貴賤を問わず使用されていたが、身内相手に使用される傾向にあった。江戸時代後期上方では女性の使用例を確認できなかったが、江戸時代後期江戸の女性の例を見ると、やはり身内での使用が中心である。例えば41・44は遊女関係での使用である。遊女は同じ置屋で生活を共にしており、仲間内での関係といえる。42・43も風呂屋という当時のコミュニケーションの中心となる場での会話である。つまり仲間内での会話と捉えられる。用例42は女性から男性に対するものであり、この二人は夫婦ではない。「ながしの男」は45年も風呂屋で働いている人であって、女性たちとの仲も良く、言葉遣いも許されている人物であると『浮世風呂』では説明される。女性の側からも言葉

遣いに気を遣わなくてもよい関係であることがうかがえる。用例45は親子の会話である。以上の点は江戸時代前期上方と変わらない。また場面に注目すると、用例44のように話し手が怒っているときも使用されている。このような用法は江戸時代前期上方にも見られ、地域は異なるが共通したものであるといえる。しかし、江戸時代前期上方では、いわば話し手の感情が正の方向に向いているときに使用される例が見られた(用例23参照)。しかし、江戸時代後期江戸ではそのような例は見られない。この時期には用例43のように、女性同士で相手を罵倒する場面での使用例もある。女性が使用する場面からもオレの用法が狭まっていることがわかる。これは使用される階層を見てもわかる。江戸時代後期江戸の使用例は町人女性である。女性上層町人の例はない⁷⁾。お姫様など武家に関係するような例は見られない。ただし、江戸時代後期では上層町人の例自体を見ることが難しい。ただ、お屋敷帰りの女性の言葉などを見ると、オレは使用されていない。用例42の発話者である女性は「悪たれと呼ばれるおしゃべりの神様」と言われる。つまりオレは丁寧な言い方ではないといえる。江戸時代前期上方と比較して、男性の使用例はほぼ同じであると思われるが、女性の使用については、異なっているといえる。

5.3 江戸時代後期江戸における女性のオレについて

老若男女がオレを使用するが、女性の場合は、オレを使用する場面に制約がある。これは江戸時代前期から女性が使用できるオレの用法が狭くなっているからである。つまり女性がオレを使用しなくなっているということである。この事情について、神戸(2014)では「道中粹語録」(1781頃成立)の序に着目している。

46) 学者の足下、藩中の貴殿、俠者のおみさん、通のぬし、何れもきさまはきさまなり。その返報に不佞といひ、身どもといひ、おれがといひ、わつちといふ。いずれも拙者は拙者なり。

(「道中粹語録」序 第10巻221頁)

この記述はそれぞれの階層の人物がどのような人稱詞を使うかということを書いたものである。学者は対称に足下を使い、自称に不佞を使用するというように、対応している。この中にオレが見られ、オレは俠者の自称とされる。神戸(2014)はこの記述から洒落本「俠者方言」の人稱詞について「オレ(22/目下・同輩以下)・オレ(19)・オイラ(8)・ワシ(6)・ワタシ(1/女性の例)」の調査結果を提示し、さらにここから

女性がオレを使用しなくなった理由を次のようにまとめる。私にまとめる形で記しておく。

- 47) オレを俠者という反社会的存在が、自称として使用したため。
- 48) 江戸時代後期（文化・文政の頃）になって女性が使用しなくなったのかという点については、オラー（オレの異形態）が一般町人男性に多用されるようになり、俠者の詞としてのオレ類の使用を嫌った。

女性がオレの使用を忌避したという点については、筆者も同意する。しかし、用例 44・45 で挙げた用例は天保年間の「春色梅児誉美」「春色辰巳園」からの引用である。神戸（2014）では文化・文政頃の洒落本を中心に述べている。神戸（2014）が指摘するよりも後の時代でも女性のオレを確認することができる。そうすると女性が忌避した理由を特に用例 47 のように「反社会的な存在が使用したため」と限定するには無理があるように思われる。ここは、神戸（2014）でも述べるように、オレを一般町人が罵倒表現で多用しているという事実を踏まえて、女性がオレを使用することを避けたとする方がよいだろう。そうでないと、江戸時代後期上方で使用されていない理由を説明することができない。以上述べてきたことをまとめると、以下のようになる。

- ① 男女ともにオレを使用する場面は類似しているが、女性の場合は身内に限定される。
- ② このような状況になった背景には、男性の使用状況などから、女性が自称のオレを使用することを避けたと考えられる。

6. 明治以降のオレ

さて、前章では自称のオレが男女ともにどのよう使用されてきたのかについて見てきた。では江戸時代後期江戸から移り変わって明治以降ではどのようにオレが使用されているかという点、男性については大きな変化はない。

- 49) おれのあそびかたはどうだのかうだのと通がつてゐるんざんすが
（安愚楽鍋「半可の江湖話」13オ7）
- 50) ヤイ名前をなのらんか。此畜生。おれを誰だと思やアがる。桐山勉六といふ豪傑だぞ。
（「当世書生気質」114上19）
- 51) （源七）「さあ貴様が行くか、おれが出ようか」と烈しく言はれて（お初）「お前はそんな

ら真実に私を離縁する心かへ」

（「にぎりえ」源七→お初 268 頁）

用例 49 は明治 4 年に出版されたもので、用例 50 は明治 20 年である。いずれも江戸時代のもので大差のない場面での使用である。明治 20 年頃の書生は知識層であり、彼らの使用する言葉を書生言葉といった。人稱詞で言えば「僕・我輩」が該当する。しかし桐山はいわゆる書生言葉を使う人物ではなく、普段からオレを使う。そもそも桐山には乱暴者・硬派というイメージがつきまとう。このような人物がオレを尊大語的に使用している。用例 51 は夫婦が喧嘩している場面である。源七がお初を罵る場面でオレが使用される。江戸時代後期江戸と大差のない。

女性の例を見ると、男性ほど用例が見られるわけではない。これは江戸時代後期江戸から女性が自称のオレの使用を避けていたことを踏まえれば、当然のことである。江戸時代後期江戸であったならば女性がオレを使用するのは身内の関係であった。そこでその関係を中心に調査すると、下記のようにオレではなく、私を使用されていることがわかる。特に江戸時代後期江戸では遊里関係の女性が使用していたこともあるので、遊里関係の人物が登場する作品を見ても「私」である。

- 52) 慈母さん私ア口惜しくって＼／ならないよ

（『浮雲』第二編第十二回 お勢→お政 390 頁）

- 53) 此処は私しが遊び処、お前がたに指でもさゝしはせぬ、ゑゝ憎らしい長吉め

（『たけくらべ』美登里→長五郎 142 頁）

明治以降に女性のオレが全く見られないかという点とそうではない。例えば、下記の用例 54 では女性の使用する「俺」がある。

- 54) 熊吉や、そんなことを言はないで、小さな家でも一軒借りることを心配して呉れよ。俺は病院なぞへ入る気には成らんよ

（『或る女の生涯』おげん→熊吉 374 頁）

話し手である「おげん」は 60 歳という設定である。この作品は 1921（大正 10）年に発表されていることを踏まえれば、江戸時代生まれの年配の女性が使用しており、古語的な使用と考えることもできる。しかし、「俺」をどう読むかという点には注意が必要である。用例 54 に振り仮名はないので、少なくとも「おれ・おら・おいら」の読みが考えられる。東京の女性がオレを使用していないように思われる。しかし下記の用例 52 の発話者である「お品」は 20 代の女性である。

- 55) （勘次）「靱が少しかかったな」勘次はふと

そういった。／（お品）「そうだっけかな、それでも俺ら唐箕は強く立てた積なんだがよ。今年も赤も夥多だが磨臼の切れ方もどういふもんだか悪いんだよ」とお品は少し身を動かして分疏するようにいった。（長塚節『土』お品→勘治 30 頁）上記の「俺」には振り仮名があり、確実に女性が「オレ」を使用している例である。本作品は 1910（明治 43）年に東京朝日新聞に連載されたものであり、明治時代においても、女性が自称のオレを使用していた証左となる例である。しかし、『土』は茨城県の農村を舞台にしている。作者である長塚節も茨城の出身である。東京朝日新聞に連載されているといっても、明治東京生まれの人物が使用しているわけではない⁸⁾。つまり、明治東京語で女性のオレを認めることはできない。今回確認できたのは東京以外を出身地とする女性のみであった。東京の女性が使用するオレの例については、今後も調査を続けていかなければならないが、現代日本において、北関東や東北などの女性がオレを使用するという下地を見ることができる。

以上をまとめると次の通りである。

- ① 男性が使用するオレの用法は江戸時代後期江戸と比較して大きな変化はない。これは現代東京語と変わらない用法といえる。
- ② 明治時代以降、東京生まれの女性が使用するオレを確認することができなかつたが、東京以外を出身地とする女性のオレは確認することができる。

7. 自称・対称のオレの語源について

前章までにおいて、オレの歴史的変化と、その中で女性がオレを使用しなくなったのかという、疑問点に対する解答は示し得た。残された課題は、オレの語源である。オレには対称と自称の用法があつたが、対称は室町時代には見られなくなり、自称は平安時代末期から現代まで使用されているということ述べたわけであるが、では自称と対称との関係をどのように捉えたらよいだろうか。語源を探ることで自称と対称との関係について考察していくことにする。

さて、語源を考えるときの定石として、任意の語と語形が近いものをまずは語源として疑うということがある。オレに関すれば、語形としてもっとも近いのはオノレである⁹⁾。オノレを語源とした場合、以下の可能性が考えられる。

- ① 人称詞オノレから自称・対称のオレができた。
- ② 時代的な先後関係から、自称のオレは対称のオレから派生した。
- ③ 対称のオレは古来日本に存在した語で、自称のオレはオノレから派生した。つまり別の語源である。

まず①についてである。人称詞オノレは言うまでもなく、奈良時代から見られる。奈良時代のオノレの用例を挙げておく。

- 56) 所以に、小心の己を励まして日に一日を慎むことは、蓋し百姓の為の故なり（臆病な自分を励まし、一日一日を慎んできたのは、思えば人民のためであった）（『日本書紀』 ②209 頁）

- 57) おのれ故罵らえて居れば青馬の面高夫駄に乗りて来べしや（そなたのせいで、叱られているところへ、青馬の、図横柄な駄馬に、乗ってきてよいものか）（『万葉集』 308 番歌）

奈良時代のオノレには、自称と対称の例を確認できる。そこで試しに記紀および万葉集に見られるオノレをジャパンナレッジで検索してみると、下表のような結果を得た。

	自称	対称	反射指示
日本書紀	15	0	5
古事記	1	0	1
万葉集	0	1	2

対称のオノレがほとんど使用されていないことがわかる。そもそも、ある単語が変化を起こす場合は、その単語が多用されてからというのが一般的である。そうすると、対称のオレを、オノレが語形変化したものと考えすることはできない。対称のオレがオノレから出たとするのであれば、対称のオレにあつた呼びかけの用法がオノレにもあつてよいと思われる。また待遇価値を見ると、用例 56 は天皇が使用しており、聞き手を罵る場面ではない。

奈良時代のオノレが対称のオレと関係があるとすれば、用法や待遇価値は少なくとも近似していても良いはずである。しかし実際にはそのようなことはない。対称のオレがオノレを出自とすることはできないであろう。

一方、自称のオレはオノレが語源であろう。これは奈良時代からオノレが使用されており、天皇などが使

用している。オノレが多用されるようになり、平安時代末期になって、自称のオレができたと考えられる。

以上のことから①の語源説は、自称については当てはまるが対称については当てはまらない。この仮説は不適当と考えるべきである。

次に②について見てみよう。オレについて、自称と対称とに分けて見てきたが、自称は身分の高い人が使用し、丁寧な語感を有するものであった。それに対して対称のオレは罵る表現が多かった。仮に対称のオレが自称へと変化したと仮定する。同時代に同形の人称詞が存在するとき、自称詞が対称詞に変化することが多い。例えば、「自分・手前・我」などである。これらの例を古典語に安易に当てはめるつもりはないが参考にはなる。つまり、対称詞が自称詞になることは稀ではないかということである。そもそも自称詞が対称詞となる場合は、自称詞の待遇価値が落ちていること、話し手の視点が聞き手に近くなっている場合が考えられる。対称のオレが自称のオレへと変化したならば、その待遇価値も自称詞へと受け継がれると考えられる。しかし実際にはそのようにはなっていない。日本語の敬語語彙には、敬意逡減の法則というものがある。これは丁寧度が下がった語がふたたび丁寧な語に戻ることはないというものである。対称のオレから自称のオレへと変化し、その後、自称のオレの待遇価値が上がり、そこから現代につながるオレのように待遇価値が下がったと考えることは、その法則に反する。確かにオレだけが特別であるという考え方もある。しかし新語が生まれるときに、しかもそれが自分を指す場合に、わざわざ丁寧さのない言葉で、しかも謙遜とは異なる語を用いて、自分自身を指す理由はない。以上から、対称のオレが自称へと変化したと考えるには無理があると思われる。

最後に③について検討してみよう。前章までにおいて、対称のオレが奈良時代から鎌倉時代まで見られることがわかっている。この対称のオレについて奈良時代と平安時代の用法を比較すると、罵倒表現であること、呼びかけ語と思われる例が存することの2点で共通している。つまり、対称のオレは奈良時代から鎌倉時代まで共通しているものと考えられる。

また①を検討した時に、オノレと対称のオレとは関係がないことを述べている。つまり、対称のオレの語源はオノレではなく、元々あった語ではないかと考えられる。一方、自称のオレはオノレが語源と考えられる。これは先のも述べたことである。一人称のオノレは

58) おのれ世に思ふことなし。忠こそがことを思ふなむ、この世は離れがたく思ふ。〈私は今となってはもうこの世になんの未練もございません。ただ忠こそそのことを思うと、この世を離れがたく思われます。〉(『宇津保物語』忠こそ 母君→父大臣 210 頁)とあるように丁寧な場面で使用されている。自称のオレと用法が重なる。ただ、オノレの方が多く使用されており、自称のオレは多用されるほどではない。

以上のことから、オレの語源として、③の仮説を採用しておきたい。

8. まとめ

本稿で述べてきたことの要点をまとめると、次の通りである。

- ① 奈良時代の文献に見られるオレは対称であり、これは鎌倉時代までは使用される。しかし室町時代以降は使用されない。
- ② 自称のオレは平安時代末期頃から使用されているが、当初は丁寧な語であったものの、時代が下ると、野卑な語へと待遇価値は変化した。
- ③ 自称のオレは現代も男女共用であるが、東京語で使用されないのは、江戸時代後期江戸において使用される自称のオレが野卑な言葉であったために女性が避けたからと考えられる。
- ④ 対称のオレは元々文献以前から日本に存在したと考えられる。一方自称のオレは人稱詞オノレを出自とすると考えられる。

日本語の人称詞は、諸外国語と比較して、種類が多い。これは現代に限らず古典語においても同様である。しかし古代から語形も変えずに使用されてきた人稱詞もある。その一つがオレである。人稱詞の歴史的な変化については、これまで特に論じられることがなかった。もちろん、時代・文献ごとの人稱詞を論じた文献は多数ある。しかし歴史的な変化を論じた文献はほとんどないといってよい。これは日本語の人稱詞は消長が激しく、歴史的な変化を追うことが難しいということがある。しかし、本稿でもオレとの関係で取り上げたオノレも奈良時代から使用されている人稱詞である。消長が激しいとは言うものの、中には古代から使用されているものもある。本稿を一つのモデルケースとして、人稱詞の歴史的な変化について考察することは、現代の日本語で使用される人稱詞にどのような付加価値があるかを考える契機となる。今後は対象とする語を変えて、オレとは異なる人稱詞の変化過程を明らかにしたい。

【注】

- 1 近年では、「オレっ娘」と称される女性キャラクターがアニメや漫画などで見られるようになってきている。例えば、「千と千尋の神隠し」に登場するリン、「ドラゴンボール」のランチ、「艦隊コレクション」の天龍などがあたる。これらのキャラクターが使用するオレは、オレの語史とは関係なく、単に登場人物のキャラクター設定のために使用されているものと解釈される。なお、「オレっ娘」だけではなく「ボクっ娘」というものもある。これは一人称詞にボクを使う女性キャラクターを指す。ボクについては、漫画だけでなく浜崎あゆみ、AKB48などの歌詞に影響を受けた女性が使用することもある。
- 2 個人情報もあり、ツイートやリツイートなどの情報は示さないが、2010年の7月のTwitterにおいて、以下のようなものがあった。「／」は投稿者が変わっていることを示している。「／」は、文献から引用する際に、発話者が変わるときにも用いるようにした。
宮城もそう。若い人はもちろん使わないけど。／福島でも、年配者は使うかも。若い子は知らない。／東北弁では、女性の一人称がオレなのは普通なのだろうか。青森・秋田・山形では確認済み。／他の地域だと、年配の方は女性でもオレって使うのか。しかし俺の地元、若い子も普通にオレって使ってたな。JC（筆者注：女子中学生）もJK（筆者注：女子高生）も使ってた。
- 3 依拠した本文の頭注には「俗語的用法」と断った上で、「口女への呼びかけの語」と説明される。
- 4 例えば、「揚げば尊し」の歌詞には「今こそ別れめ」とある。これは係助詞「こそ」と、意志の助動詞「む」の已然形であり、現代にまで残る係り結びの名残である。このように歌には古い形が残されることがある。
- 5 例えば、自分自身のことを名前で呼ぶ子がいる。そのような子も、成長する過程で、その年齢にふさわしい言葉遣いをしていくものである。幼少の頃に使用していた語が、そのまま大人社会の中で使用するとは、現在の目から見ても、考えにくい。
- 6 対称のオレが使用されなくなっている理由は、奈良時代から使用される対称のオレが、罵倒表現として使用されるオノレに取って代わったということが考えられる。
- 7 そもそも上層町人女性が描かれることが少ない。
- 8 『土』が新聞に連載されていることを踏まえると、読者であった、少なくとも東京の人たちには、女性がオレを使用することに違和感はなかったと考えてよいと思われる。ただし、それが東京の人ではない女性が使用するという認識であったのか、元々女性も使用するという認識があったのかまではわからない。
- 9 辻村(1968)では、自称のオレはオノレから、対称のオレについては、本稿と同様にオレが古来からあったという考えを述べる一方で、琉球語との関係や、奈良時代に使用された人称詞アレとの関係も視野に入れている。音韻変化を証明するだけの材料はなく、オノレに注目しておくのが妥当であろう。

【参考文献】

- 1 神戸和昭 (2014) 「江戸東京語における自称オレの女性忌避」(『千葉大学語文論叢』左1～13頁)
- 2 坂梨隆三 (1984) 『江戸時代の国語(上方語)』東京堂出版
- 3 小松寿雄 (1985) 『江戸時代の国語(江戸語)』東京堂出版
- 4 辻村敏樹 (1968) 「記紀に見えるオレ」(『敬語の史的的研究』所収 91～107頁 東京堂)
- 5 彦峰佳宣 (1983) 「おれ」(『講座日本語の語彙』九 170～174頁 明治書院)
- 6 森野宗明 (1968) 「平安時代の言語作品に見出される子供のことば使いについて」(『青山学院女子短期大学紀要』Vol. 22 1～26頁)
- 6 山崎久之 (2004) 『増補補訂版 国語待遇表現体系の研究』(『武蔵野書院』第二版使用)
- 7 米田達郎 (2009) 「江戸時代の狂言台本詞章における一人称詞オレについて」(『語文』(大阪大学) 94輯 33～43頁)

【調査・引用資料】

古典文学作品を引用する場合には、基本的に『新編日本古典文学全集』を使用した。訳文も同様である。洒落本は『洒落本大成』からの引用である。『浮世風呂』など滑稽本・人情本は、『岩波古典文学大系』からの調査・引用である。『大蔵流狂言虎明本』は『大蔵虎明能狂言集 翻刻・註解』(清文堂 2006年)から引用している。明治以降の作品については、『新日本古典文学大系 明治編』(岩波書店)を利用した。『安愚楽鍋』・『当世書生気質』については、国立国会図書館デジタルコレクション (<http://dl.ndl.go.jp/>)にて原本写真を参照・引用している。ただし、『ある女の生涯』は現代日本文学全集『島崎藤村集』、『土』(長塚節)は新潮文庫から引用。記した以外の作品は、引用の際に示した。